

世界とつながり 未来を拓く 広島グローバル人。

世界を元気にした人は、
日本も元気にできる！

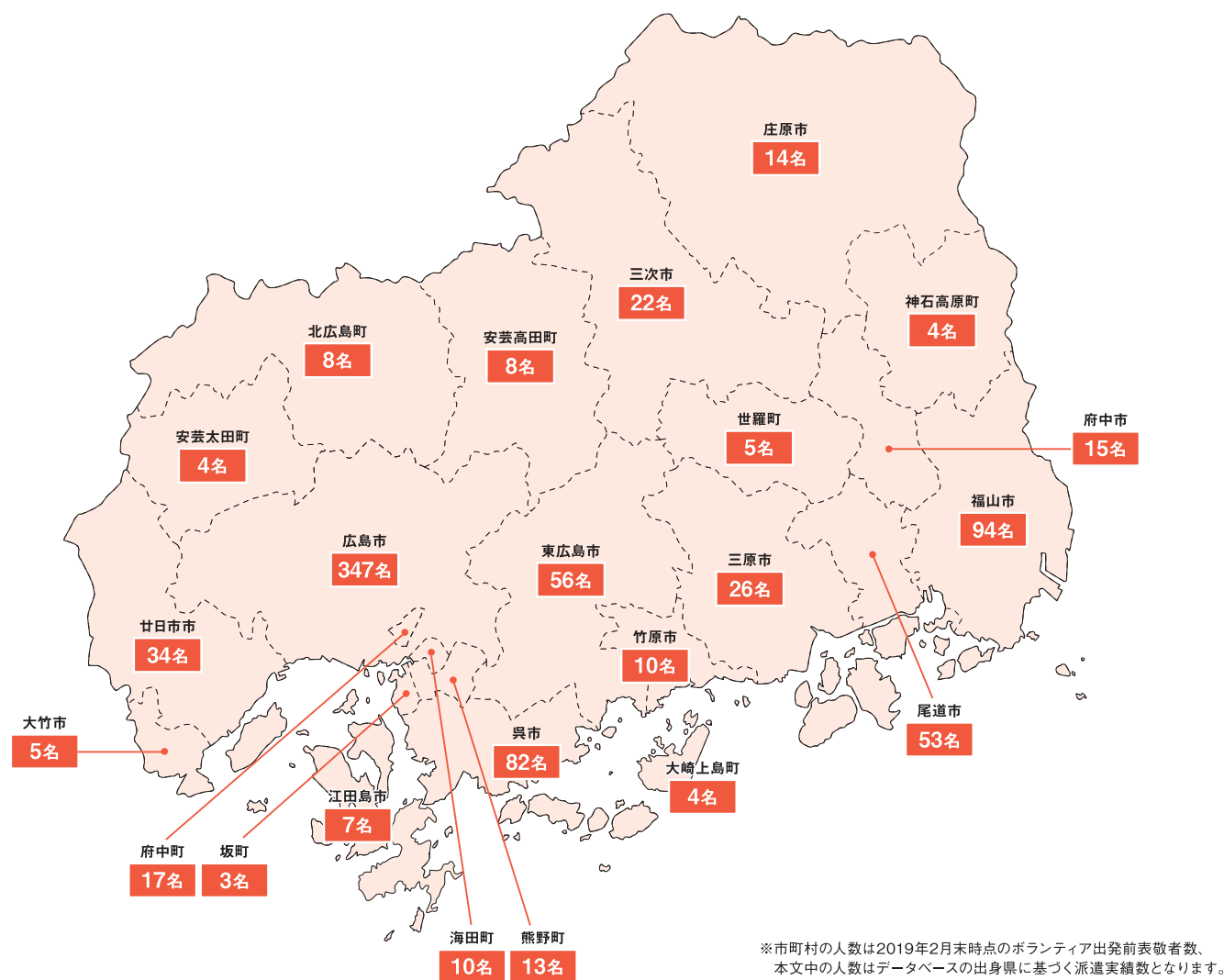


今度は地域を、もっと元気に

広島県から青年海外協力隊・日系社会青年海外協力隊に参加した人は970人を超えました。

今、広島県では、青年海外協力隊として活動後、この地域を元気にしようと、さまざまな場所でその力を発揮している人たちがいます。

《 広島県 青年海外協力隊及び日系社会青年海外協力隊派遣数 》



まっさらの目だから見えること 海外の視点を日本に生かしたい

No.01

広島県地域政策局平和推進
プロジェクト・チーム
主事

河越 信二郎さん
かわ ごえ しん じ ろう

▼派遣国



パラグアイ

▼職種

村落開発普及員



お産はゴールでなく通過点 女性の人生をサポートする助産師に

No.02

医療法人双葉会 産科・婦人科
藤東クリニック 助産師

西村 光マリアさん
にし むら ひかり ま り あ

▼派遣国



モロッコ

▼職種

助産師



自分のできることを精いっぱい 小さな挑戦を重ねて大きな動きに

No.03

NPO法人ピースウィンズ・ジャパン
(PWJ)

田邊 圭さん
た なべ けい

▼派遣国



キルギス

▼職種

野菜栽培



みんな違うけど実は似てる だから、世界は面白い

No.04

三原市立西小学校
教諭

田中 涼子さん
た なか りょう こ

▼派遣国



カンボジア

▼職種

小学校教諭



芝の管理は予想外の連続 どんなことも何とかなる

No.05

山本コーポレーション株式会社
緑地営業部

空本 季輝さん
そら もと とし き

▼派遣国



ペルー

▼職種

野菜栽培





まっさらの目だから見えること 海外の視点を日本に生かしたい

No.01

広島県地域政策局平和推進プロジェクト・チーム
主事

河越 信二郎さん

かわ ごえ しん じ ろう

兵庫県出身。中学生のとき、担任の先生から協力隊のことを聞く。高校生のとき、アフリカのスーパーマーケットを紹介する新聞記事を読み、開発途上国に関心を持つ。大学では交換留学でカナダへ。卒業後はIT企業に就職するも一大決心をして協力隊を目指し、2009年に村落開発普及員としてパラグアイへ赴任。帰国後、イギリス大学院に留学して開発学を学ぶ。国連ボランティア、JICA関西での仕事をを経て、2016年から現職。

▼派遣国



パラグアイ

▼配属先

エイレテ・ニューアイ養蜂組合

▼職種

村落開発普及員

▼活動内容

養蜂組合ではちみつの加工品事業を立ち上げ、生産拡大と安定経営を図る。また、組合運営の支援を行う。

▼派遣期間 2009年1月～2011年7月

やりたいことを仕事にする

広島県の使命である世界の核兵器廃絶と復興・平和構築に取り組む、広島県地域政策局平和推進プロジェクト・チーム。河越さんはこのチームで、フィリピン共和国ミンダナオ地域の自治政府づくりのための人材育成を担当。広島の復興の歴史を海外の地域づくりに役立ててもらおうとミンダナオから自治政府関係者等と呼び寄せ、広島でユニークな地域振興を展開する現場を訪問したり、広島大学と組んで勉強会を実施したりと、企画提案やコーディネートに奮闘しています。「地域振興は私自身が学びたいこと。今、まさにやりたかった、ドンピシャの仕事させてもらっています」



行動することが自信に、協力が励みに

「海外での経験を積み、それを日本にいかせる生き方をしたい」と2009年、協力隊の村落開発普及員としてパラグアイの養蜂組合に向かった河越さん。養蜂の仕事現地の人とともにする中で、はちみつを生産するよりも売ることになっていることが分かりました。そこで、はちみつ入りのキャラメル、リキュール、石鹸、プロポリスエキスを混ぜたシロップといった加工品を作り、販路開拓に動きます。養蜂組合の組織を強化し、一人では買えない機材や設備を共同購入する仕組みや、組織力を利用して商品開発や技術指導を受ける体制を整えていきました。これらには、社会人の経験が役に立ったと言えます。

ただ、「基本的に個人単位で事業を行う組合員に、組織のメリットを理解してもらうことはとても難しかった」とのこと。一人で活動することに虚しさや不安を感じるときもありましたが、次第に協力してくれる人が出てくるとそれが大きな励みに。加工品づくりでは組合員の子世代が興味を持って協力してくれるようになり、のちに組合の青年部となったそうです。任期2年目の終わりには、組合員らとパラグアイ政府に加工場の建設を申請。認可されたことで組合員たちに自信が生まれ、次はこんなことがしたいという意欲も出てきたそうです。



(上) 組合青年部のみんなと
(左) はちみつの収穫作業

世界の復興と日本の地域振興に取り組む

「協力隊に行くという決断、パラグアイで課題を見つけて行動するという主体的な動きを経験できたことで、自分の人生の舵を自分で取ることができるようになりました。その環境を楽しめるようになりました」と河越さん。

また、パラグアイをはじめとする海外での経験によって、日本のよさに気づくことができたという点も大きな収穫だったそう。「日本の中山間地域でよくみられる地域で協力し合うというあり方は、世界に誇れる素晴らしい特長です。これをもっと大事に、継承していきたい」と言います。

フィリピンからの研修員が日本を見たときに何に驚き、感動しているのが気になるところ。「私がパラグアイで、はちみつの生産だけでなく加工品にも取り組もうと思えたように、外部者としてのまっさらな目で見ることによって気づけることがあります。それを日本の地域振興に生かしたい」。世界から、地域から、両方の視点を持って仕事に取り組む河越さんです。



ミンダナオ研修員へ職場紹介

河越さんは
こんな人！

広島県地域政策局平和
推進プロジェクト・チーム
担当課長

下崎 正浩さん



河越さんには復興・平和構築の取り組みの中で、主にフィリピンのミンダナオ地域の自治政府人材育成支援を担当してもらっています。海外での実地経験がある彼の言葉には説得力があり、誰に対しても自分の言葉でしっかりと落ちていて説明できる姿が頼もしいですね。協力隊など海外でのキャリアに加えて、今後行政マンとしての経験を積み、国際課など他部署とも連携して幅広く活躍してほしいです。

助産師に 女性の人生をサポートする お産はゴールではなく通過点

医療法人双葉会 産科・婦人科
藤東クリニック 助産師

No.02

西村 光マリアさん

にし むら ひかり ま り あ

静岡県出身。両親がタイへボランティア活動に行くなど国際協力が身近な環境で育つ。母親から海外の話と「青年海外協力隊にいきたい」という夢を聞き、いつしかそれが西村さん自身の夢に。大学で看護師、助産師、保健師の資格を取得。地元の産婦人科で助産師として5年勤務し、青少年に向けた性教育の授業も実施。協力隊から帰国後は広島に移住し、現職。

▼派遣国



モロッコ

▼配属先

エルラシディア市保健省

▼職種

助産師

▼活動内容

妊産婦の安全な出産を目指した母親学級の地方部への拡大と定着を図る。中高生への性教育授業も実施。

▼派遣期間 2012年6月～2014年6月

できるだけスムーズなお産に

「やっぱり助産の仕事が好きなんです。産んで良かったと思えるお産と一緒に目指したい」。モロッコで助産師として活動し、助産への情熱を一層強いものにした西村さん。現在、産科・婦人科「藤東クリニック」に助産師として勤務しています。

同院が行っている「助産外来」も担当。医師による妊婦健診と同じように、助産師による妊婦健診や保健指導を受けることができます。一人当たりの時間は30分。「妊娠中の性のこと、お産のこと、母乳のことなど、細かくじっくりと話をすることができます。どういったお産をしたいのかを具体的に、それを実現するためのお手伝いをしています」。お産のプランに沿いながら、正常な状態でお産に臨めるように体重や血圧の管理については少し強く言うこともあるそう。その厳しさは、「できるだけ正常な状態でお産に臨み、スムーズなお産にしてほしい」という西村さんの願いの表れでもあります。



参加型の母親学級を目指して

大学では看護師、助産師、保健師の資格を取得し、地元の産婦人科で経験を積んで協力隊へ。向かったのはモロッコ。現地では15年ほど前から日本の母子手帳、母親学級が導入されており、その普及と活用、現地で母親学級が運営できるようにするための三代目隊員として赴任しました。

西村さんは現地の看護師、助産師とともに、母親学級を巡回。すると、講師が話して終わりという一方的な指導スタイルが見られ、出産後のケア、授乳のアドバイスなどが足りないという気づきもありました。「一方的に話すだけでは相手はすぐに忘れるし、実践に移しにくい。自分で考えて振り返る、コミュニケーションをとりながら進める参加型スタイルに」と訴えたところ、現地の人から「あなたがやって」と言われたそう。「勇気をもって断り続けました。私がやったのでは意味がない。現地の方にやってもらわないと、社会は変わらない」。この思いを理解してもらうまで、諦めずに説明を繰り返したそうです。

任期2年目のころ、県内にいた違う職種の隊員と連携して県内をよくしようとする動きが生まれました。西村さんが所属する保健省と他の隊員が所属する教育省が協力し、中高生への性教育の授業を実施。「私がいくら頑張っても、現地の人が変わろうとしなければ変わらない」と、現地の看護師、助産師、看護学校の学生たちにも参加してもらい、現地の言葉で現地の人に伝えてもらうようにしました。

自分と未来は変えられる

モロッコで「問題を自分事にとらえて取り組まなければ何も変わらない」ということを実感した西村さん。その気づきを、JICAが行う出前講座で広島県内の小中学生、看護学生へ伝えていきます。その時、西村さんが強調するメッセージがあります。「過去と他人は変えられない、自分と未来は変えられる。皆さんの未来はこれから。自分を知ってどうなりたいかを考えて、自分と未来をつくってほしい」

そんな西村さんがこれからつくりたい自分の未来とは。「お産はゴールではありません。通過点です。今は、女性が妊娠した時点で妊婦さんにお会いするのですが、もっと前から女性が自分の体のことを考え、ライフサイクルの中でお産を考えられるようにそばにいて働きかけていきたい」。女性に寄り添い、助産師の仕事の枠を広げていく西村さんです。



超音波検査を行う西村さん

西村さんは
こんな人!

医療法人双葉会
産科・婦人科
藤東クリニック 師長

若林 昭子さん



彼女から感じるのは仕事への意欲と、幅広く学ぼうとするバイタリティー。協力隊経験によっていっそう磨きがかかったのだと思います。外来業務でも病棟業務でも、人に合わせて説明の仕方を変え、臨機応変に対応してくれています。それは彼女の優しさであり、相手に理解してもらうという物事の本質をつかんだ行動です。頑張る彼女の姿がスタッフを奮起させ、励みとなっています。



自分のできることを精いっぱい 小さな挑戦を重ねて大きな動きに

No.03

NPO法人ピースウィンズ・ジャパン (PWJ)

田邊 圭さん

た な べ けい

広島県出身。農業系の高校に進学。協力隊OBの先生に南米での写真を見せてもらい、「カッコいい」と思ったのが協力隊を目指すきっかけに。大学で所属したボランティア部の顧問が人間植物関係学を専門としていたことから植物への興味を強くし、卒業後は熱帯農業を学ぶため宮古島へ。2012年、協力隊の野菜栽培でキルギスへ赴任。2014年9月にPWJに入職、2015年7月から地域活性化プロジェクトを㈱神石高原ティアガルテンと協同で実施中。

▼派遣国



キルギス

▼配属先

ジュティオグズ県事務所農業局

▼職種

野菜栽培

▼活動内容

地域の農家を対象として、野菜栽培指導などを行う。

▼派遣期間 2012年3月～2014年3月

ふるさとの活性化のために

標高700mの高原で動物との触れ合い、ツリーハウスづくりや森林セラピーを楽しんだり、ここで育った野菜を使った料理を味わったり。いのちをいづくしむ場として2015年にオープンした「神石高原ティアガルテン」。(株)神石高原ティアガルテンとこの地に拠点を構える国際協力のNPO法人ピースウィンズ・ジャパン(PWJ)が協同し、神石高原町の地域活性化プロジェクトを実施しています。

田邊さんは青年海外協力隊として2年間の活動を終えて神石高原町に戻り、PWJに所属。現在、神石高原町の産品を使った商品開発やイベントの企画運営を担当。過疎化が進むこの地域の活性化を目指して「仙養ヶ原地域づくり協議会」を発足。事務局長として、園内の農園で有機栽培のワークショップを開催したり、「夏は農業、冬は酒造りという新たな生活スタイルの提案になれば」と、定住を目的に酒蔵を訪ねるツアーも企画・実施。レンタル農園も計画中です。



自分を見つめ、自分を知った2年間

田邊さんが協力隊として赴任したのは、中国との国境近く、キルギスのイシククリ州クズルスー村。現地に行ってみると、バイオガスプラントから出る消化液を利用した温室野菜栽培の指導という要請と状況が異なり、温室や消化液が利用できない状態でした。田邊さんの協力隊活動は、課題を見つけ、村にあるもので解決できることを探すことから始まりました。

キルギスにいた協力隊員やJICAの国際協力専門員に相談しながら、前任者がつくったビニールハウス跡で野菜のモデル栽培を行い、収穫量を増やす、質を上げることに取り組みました。ほかの協力隊員が行っていた日本語学校を引き継ぎ、「一村一品」キャンペーンで農業生産物を使った加工品づくりにも参加。生活面では、最初は食べられなかったキルギスの伝統料理を食べ続け、食べられるように。「いち村人」として生活することで、信頼関係を少しずつ築いていきました。「自分一人でできることはたかがしれている。できることを精いっぱいやろう」。キルギスでの経験は、自分を客観的に見つめ、自分の力を知るよい機会となったそうです。



(上)活動先の野菜畑の前で
(左)りんご栽培について指導

日本もキルギスも似ている

神石高原町の地域活性化事業に携わって約1年。「キルギスなどの開発途上国と、神石高原町は似ている」と田邊さんは感じています。キルギスでは農閑期になると男性は出稼ぎに、村に残るのは女性や子ども、お年寄りだけ。お金を稼ぐところがない、生活できないから町を出て行く、そして帰って来ない。ミャンマーやネパールでも、そして神石高原町でも同じように、町で経済が成り立ちづらい状況が見られると言います。

「PWJやティアガルテンの活動に対して、町を変えてくれそうという期待もあれば、反対に、かき回されそうという不安や反発も多少はあります。ですが、刺激によって人が動き町に変化が起こり、面白い町になっていくと思う。これからも、その動きの一部にかかわってほしいですね」



体験キャンプでたき火の指導



担当した養蜂体験のイベントで

田邊さんは
こんな人!



NPO法人
ピースウィンズ・ジャパン
竹内 雅人さん

物事をぐいぐい進めていくことができる、エネルギー的な人です。常に全体を見る俯瞰の目を持ちながら、細かいところにも気づいて動けるフットワークの軽さもあります。そこにはきっと、協力隊として開発途上国で活躍した経験が生かされているのだらうなと思います。これからも神石高原町の地域活性化に取り組んでくれることを願っています。

みんな違うけど実は似てる
だから、世界はおもしろい



No.04

三原市立西小学校
教諭

田中 涼子さん

た な か りょう こ

広島県出身。大学時代に行ったベトナムで「開発途上国の子どもたちのために何かしたい」という思いを持つ。その後、児童養護施設での実習をきっかけに「海外よりも、まずは日本の子どもたちのために」と小学校教諭に。2010年にJICAが主催する教師海外研修でアフリカのマラウイに2週間滞在し、「現地に長期滞在して活動したい」という思いを強くする。2012年に協力隊に参加。帰国後、復職。広島大学大学院国際協力研究科に在学中。

▼派遣国



カンボジア

▼配属先

クラチェ州小学校教員養成校

▼職種

小学校教諭

▼活動内容

教員採用試験後に入学する2年制の小学校教員養成校で、同僚教員とともに、情操教育(体育・音楽・図工)の授業計画の作成や、学生への指導を行う。

▼派遣期間 2012年6月～2014年3月

先生にも夢がある！

休憩時間のチャイムが鳴ると、「先生！」と一斉に駆け寄ってくる子どもたち。抱きつく子もいれば、遠くから話しかける子もいます。その中心で笑顔を浮かべるのは、三原市立西小学校1年生の担任を務める田中さん。「いろんな子どもたちがいて本当におもしろい。いつも楽しくて、自然と笑顔になっています」

そんな田中さんは教諭になって7年目のとき、現職教員特別参加制度で協力隊に参加。きっかけは子どもたちからの質問でした。授業で将来の夢について作文を書かせていたときのこと。「先生の夢は何？と聞かれてハッとしました。私にも夢があったはず。子どもたちの夢を応援する立場にある今、自分が夢に向かって頑張ることで、夢に向かうことの大切さを伝えられるのでは」。そう思った田中さんは、カンボジアへ向かいました。



(上) 小学校教員養成校での授業の様子
(左) 地域の教員を対象に行った体育研修の様子

これって体育？でも先生は先生！

カンボジアの体育はクメール体操(簡単な体操)が中心で、日本の体育とは内容が違っていました。近年、カンボジアの体育にも、日本の体育のように様々な運動が取り入れられてきているようですが、田中さんが赴任した当時は小学校教員養成校でも体育を学ぶのが初めてという学生が多く、指導する教員でさえも「教え方がよく分からない」という状況。そこで、まずは運動の楽しさを伝えようと、日本の指導内容を取り入れたゲームや活動を実施しました。しかし多くの学生が「自分で考えて動く」「思いを表現する」という自発的な行動に戸惑い、自由に動けなかったそうです。

赴任して1年たったころ、田中さんは、近隣3校の小学校教員を対象に3日間の体育研修会を開催。「児童期に運動経験がない先生方が主体的に取り組んでくれるのか」という心配をよそに、先生方は暑い日差しの中でまるで子どものように目を輝かせて研修や運動を楽しんだそう。全47人が3日間、一人も休まず参加するという充実した研修会となりました。研修後「早く子どもたちに教えたい」「みんなの喜ぶ顔が楽しみ」と笑顔で語る先生方の姿に、「カンボジアと日本で学校の環境や授業の内容は違うかもしれないけど、子どもたちを思う教員の気持ちに違いはない」と感じたそうです。

体育研修会後は、小学校教員養成校での授業の合間に、自転車で各小学校を回り、体育授業の定着具合を確認。授業を実践する先生も増え、手ごたえを感じる一方で「もう一步、何かが必要」とも感じていたと言います。

「世界」は広い、でも近い

帰国後は現職に復帰し、「もう一步」を探究するために広島大学大学院国際協力研究科に入学。「カンボジアから日本を見ることで発見できることも多い」と、新たな気づきは日本での指導に生かしています。2016年に再びカンボジアを訪問。「指導した内容が今も実践されていてうれしかった」。田中さんの活動が、カンボジアの子どもたちの笑顔を増やしています。

そして今、田中さんが目の前にいる子どもたちに伝えたいのは、「世界にはいろんな人がいていろんな思いや考えがある」ということ。「そのためにも、私自身が子どもたち一人ひとりを認めることが大切だと思っています。広い視野で世界をとらえ、違うから不思議だな、似ているからうれしいな、だから世界はおもしろい！ということを知ってほしい」。子どもたちと学び合いながら目を輝かせます。



国語の授業の様子

田中さんは
こんな人！

三原市立西小学校
校長
古本 節郎さん



小学校は人格形成にかかわる大事な時期。どれだけ多くの人に出会うかが、子どもたちの成長に大きく影響します。田中先生は明朗活発、パワフルな人です。協力隊に参加した意欲、好奇心、チャレンジ精神、自分の気持ちに素直に動けるところは、子どもたちだけでなく、教職員にもよい刺激になっています。物事を広い視野でとらえることができる彼女のスキルを、学校のマネジメントにも生かしてくれることを期待しています。



No.05

山本コーポレーション株式会社
緑地営業部

空本 季輝さん

そら もと とし き

広島県出身。進学した農業高校に協力隊OBが多く、海外での活動に興味を持つ。大学では「農業にも経営の知識が必要」と感じ、商学部在籍。卒業を控え就職活動をする中で、「農業をする方が楽しそう!」とふと思い、高校生のころから興味があった協力隊へ。帰国後、現職。

▼派遣国



ペルー

▼配属先

サン・マルティン・デ・ポレス小学校

▼職種

野菜栽培

▼活動内容

小学校で学校菜園を行い、それをモデルケースにして家庭菜園を広げる。グループ型派遣で、ほかの隊員と協力し農業指導に取り組む。

▼派遣期間 2013年7月～2015年6月

予想外のことも考え方次第

「社長に、どこでもやっていけるだろう!と言われ、緑地営業部の配属となりました。第一志望は実は違ったんですよ」と明るく笑う空本さん。肥料、農薬、農業用資材、ゴルフ場のメンテナンス、工業薬品、セメントなどを扱う商社「山本コーポレーション」で緑地営業部に所属し、ゴルフ場の芝の管理を担当しています。農業高校を卒業し、協力隊では野菜栽培の指導でペルーへ行った空本さんが希望していた部署は、農作物の肥料、農薬、農業資材などを取り扱う「アグロ営業部」だったそう。

ゴルフ場のメンテナンスという仕事は、空本さんが全く知らない分野でありながら、専門的な知識が求められます。見当違いの部署にきたと落ち込んだのは一瞬、「考えてみれば芝も作物。農薬や肥料の使い方などは一般農業と近いんです」とマイナスの状況をプラスに変換しました。



自分の無力さを知り、今に生かす

空本さんにとって、協力隊員としてのペルーでの2年間はチャレンジの多い日々だったようです。活動内容は、小学校で学校菜園をして家庭菜園へと広げること。「現地では指導を求められるものと思っていました。でも現地の人々は地道に野菜を育てるという支援ではなく、大型の公的支援を期待していました。自分たちが働かなければならないなら現状のままでいいのだと。私たちの思いと大きなギャップがありました」。学校菜園は思うように進まず、ペルーでの日々を過ごすほど「このままでいいのか」という不安が募ります。コミュニティの中で家庭菜園に興味を持つ人にピンポイントであったり、野菜栽培の指導をしていきました。

標高4000～5000mという地域では、空本さんがこれまで勉強してきた一般的な農業が全く通用しなかったと言います。グループ型派遣でペルーに滞在していたほかの協力隊員と相談し、行政や技術者の力を借りて農業に取り組みました。高校で学んだ畜産の知識を生かして養鶏にも挑戦。計画的に出荷するために、飼育方法や管理計画を現地の人と一緒に考えました。「私がやりたいことと私ができることがちぐはぐで、最後まで目的が定まりませんでした。社会人を経験した今なら、もっと違うことができたのにと悔しく思います」

経験することに価値がある

高校の先生から協力隊のことを聞き、「もっと知りたい!」と協力隊を目指した空本さん。「人からの話はとても勉強になりますが、どうしても偏りが生まれます。それなら自分で現地に行って、感じた方がいい。そこに自分が役に立てることがあり、それが誰かのためになるなら素晴らしいことです」。その思いは、協力隊OBでもある社長の価値観と一致しています。

芝の管理は自然が相手。「予想外のアクシデントが多いんです。そんなときでも何とかできるだろうと思えるのは、ペルーでの経験のおかげですね」。いろんなパターンの“予想外”を想定し、準備しておくそうです。どこにしようと、どんな仕事であろうと、自らの知識と体験を生かして新たなやりがいを見つけていく空本さんです。



社長と自社倉庫の前で

空本さんは
こんな人!

山本コーポレーション
株式会社 代表取締役 社長
協力隊OB

山本 紳さん



彼が協力隊OBと聞いて「どんな環境にも対応できる」と確信し、採用しました。私も協力隊OBですので身をもって知っていました。彼は今、ゴルフ場のメンテナンスという全く知識のない部署にいます。知識を得ようと一生懸命に勉強する姿、朝早く来て掃除をするといった社会のシステムにも柔軟に対応する姿に期待をしています。彼の姿を見て、協力隊OB O Gの採用を積極的に進めていく予定です。

青年海外協力隊員が

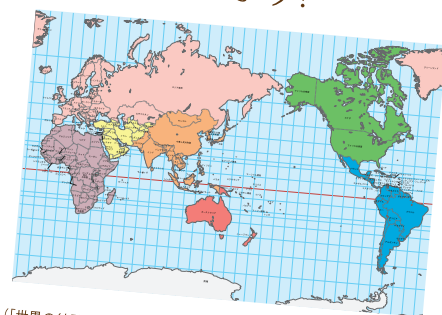
活動するのは開発途上国。

遠い国のようですが、実は世界の中の

存在感は大きく、日本や広島県とも

いろいろな繋がりがあります。

- ① 世界には約195か国の国がありますが、そのうち、開発途上国とされる国は何か国でしょう？



(「世界の統計2016」<http://www.stat.go.jp/data/sekai/0116.htm>より)

- ② 外国人にも人気の日本食。海外にある日本食レストランの数は？



(「海外における日本食レストランの数」<http://www.maff.go.jp/j/press/shokusan/service/pdf/150828-01.pdf>より)

- ③ 海外進出している広島県の企業のうち、開発途上国に進出しているのは？



(「(公財)ひろしま産業振興機構「海外進出企業ダイレクトリー(2016年)」より)

- ④ これまでに広島県から海外へ移住した人は何人？



(広島県国際化関係資料(平成28(2016)年版)より)

クイズの答えは15ページ下部をご覧ください。

中国地方を元気にする国際協力を目指して

JICA中国は、中国5県の国際協力の拠点として、市民の皆様が青年海外協力隊などのJICA事業や開発途上国に関する情報を提供したり、開発途上国の行政官や技術者に、日本の経験や技術を学んでもらう機会を提供しています。自治体やNGO、大学、民間企業などと連携した国際協力事業の推進も行います。中国地方の魅力を世界に発信するとともに、国際協力を通じた地域活性化や民間企業の海外展開の促進により、中国地方の地域創生にも貢献していきたいと考えています。JICA中国は、中国地方も元気にするウィンウィンの国際協力を推進していきます。



JICA中国

独立行政法人 国際協力機構 中国センター
〒739-0046 広島県東広島市鏡山3-3-1
TEL:082-421-6300(代)
FAX:082-420-8082



広島県JICAデスク

配属先: (公財)広島平和文化センター
〒730-0811 広島県広島市中区中島町1-5
TEL:082-242-8879 FAX:082-242-7452
Eメール: jicadesk@pcf.city.hiroshima.jp



クイズ(14ページ)の答え

A1: 約150か国です。人口でいうと世界人口約73億人のうち約8割が開発途上国に住んでいます。
A2: 約8万9千店です。そのうち半数以上(約4万5千店)がアジアにあります。アフリカにも約300店の日本料理店があります。
A3: 進出先の約7割が、開発途上国です。中国が約4割を占めますが、それ以外の開発途上国に進出している企業が約3割です。
A4: 約9万9千人で、日本で最も多くの海外移民を輩出しています。アメリカ合衆国の他に、メキシコやペルー、ボリビア、パラグアイ、ブラジルなどに広島県人会があります。



世界を変えてきたのはいつの時代も、たったひとりの強い想いだ

青年海外協力隊は現地の人びとと同じ言葉を話し、

ともに生活・協働しながら開発途上国の国づくりのために活動しています。

1965年に開始され、これまでに91か国に44,000名以上を派遣しました。

JICA中国

〒739-0046 東広島市鏡山3-3-1

TEL:082-421-6300(代表)

FAX:082-420-8082

URL: <https://www.jica.go.jp/chugoku/>

JICA海外協力隊

Q 検索

独立行政法人 国際協力機構 中国センター